

緊急災害対策のお手本

名君保科正之

一龍斎貞花

講談師

謹んで大震災のお見舞を申し上げます。

「お江」連続の途中ですが、災害対策のお手本を書かせて頂きます。

恐妻家といわれた二代將軍秀忠が、お江の目を盗んでお女中に産ませた幸松。

もしものことがあっては大変と、お江の目を逃れるため、信州高遠城主保科正光の養子に。正光死後相続し保科正之となる。お江死後も父秀忠と親子の名乗りは出来なかったが、三代家光は、仲の悪かった弟忠長と違い誠実な正之を信頼しただ一人の肉親として重用、江戸城桜田門内に屋敷を与え留守居役に。

山形の鳥居忠恒^{ただつね}死去、後継なく正之が入り3万石から一気に20万石に。家康が御三家を設けたように、自分を支えてくれる親藩づくり。「家光公を兄と思わず、忠実な臣下として仕えねばならぬ」と心に誓う正之。

長雨のため馬見ヶ崎の堤防が切れ、畠ばかりか民家が水につかるや、修復のため人手がいる、すぐに老中土井利勝に「隣国の者も協力をお許し下さるよう」当時は強大になって謀反されてはと他国者を勝手に自国に入れることが出来なかった。こうして山形はじまって以来の大工事も完成。その後も天候不順で飢饉となるや、藩の米倉を開放して領民に米を与え、一人の餓死者も無し。

会津藩主となる

会津藩加藤明成のお家騒動から領地没収、正之が23万石の主、南山5万石も預り28万石だが、御三家水戸家が25万石なのでそれより高くなってはいけなと表高23万石。

家光が亡くなるや、11歳の4代家綱の後見役に。「ご若年なんとしてもお支えしなければいけない。今後わしは死ぬまで会津には戻らぬ。領民のための政^{まつりごと}を行え、領民が満足する政をしてくれ」家老に託し死の直前まで25年間1度も帰国せず、家綱を支え民のための政を。

参勤交代で武士もふえ町も大きくなり江戸は水不足。水の元を求め玉川兄弟に調査をさせていたが、玉川上水を引けば川筋の道を通って攻められたら大変と、謀反を心配する老中達に対し、正之は民のためにと玉川上水開削を決断。

災害時緊急適切な処置

明暦3年江戸市中の大半を焼き尽した振袖火事、火の手が本丸へ迫るや、「上様には寛永寺にお移りを」「本城を出れば市民を不安におとし入れることにも。トップは本拠にあって泰然とするべき、西の丸でご政務を」

江戸市中の大半を焼き焼死者10万余人、火事が収まった後大雪。家はなく凍死、餓死する者ありという惨状。

「浅草の米蔵から1日千俵の米を出し市民へ炊き出しを」「それでは米蔵が空になりますぞ」「いざの時のための備蓄米、今出さずしていつ出すのでござる」しかし米不足から価格は上る一方「市民が困窮する。江戸の人口を一時的にへらす。ただちに参勤交代で江戸在中の23大名に帰国。4月出府予定の22大名は6月まで延期」を、将軍に進言し人口の半数が武士、この結果米の値段がにわかにならなくなって市民を安堵させ、「家を焼かれた者に救助金。旗本、ご家人には作事料を与える、町家の間口1間につき3両1分として16万両」

「それでは幕府のご金蔵が空になる、本丸に天守閣も再建しなければなりませんぞ」という老申達に対し、「幕府の貯えは、大事の時民を救うためのもの今こそ使うべき。政務は西の丸で可能、戦のない今天守閣は不要、まず民の暮らしこそ大事でござる」こうして町民を安堵させ早い復興につながっていった。そして飛び火を

防ぐ火除地、主要道路の拡張など近世城下町へと形成されていったのです。

もて余していた古米、備蓄米を炊いてご飯にして被災地へ。自衛隊、毛布、救援品も小出し。ライフラインの整備、ガソリンの供給もトップダウンで即実行。

政府、東京電力、鉄道が三味一体協議して発表すればいいのにばらばら。計画停電もあいまいで鉄道も運行に苦慮。

原子炉へ海水注入を早くしていればよかったのに炉の存続を^{そくおこな}考え即行わず大事故に、避難も10kmから20キロ30キロと、せめて最初に20キロにしておけばよいものを、不安に陥れるからと、安全を繰り返し、一層不信をつのらせる結果に。この際、政党交付金のせめて半額でも受取らず、復興資金にという政党、議員はいないのか。国民の税金でしょ。正之の決断を見習え！

剛腕という人は、自分の地元が被災地というのになにをしているのか。

その後も正之は、いざに備え官民協同管理による社倉米、社倉金制度の確立。

会津藩の“ならぬことはならぬ”を主体とする家訓の制定。仁愛の精神で民のための政を行なった正之、このような政治家のいないことは国民の不幸。企業の対応もしかり。私は独演会をチャリティにし正之を口演。一人ひとりがなにが出来るかを考え対処したいものです。

名君保科正之、改めて詳細に書かせて頂きます。